

胸水検体にて診療早期に推定し得た前立腺癌の1例

◎小林 史孝¹⁾、政 俊行¹⁾、鎌倉 佳子¹⁾、松山 友彦¹⁾
地域医療振興協会 市立奈良病院¹⁾

【緒言】前立腺癌が、胸水に出現することは稀である。今回我々は、胸水穿刺細胞診にて異型細胞を認め、同胸水からセルブロック法による免疫組織化学染色を行い、前立腺癌を推定し得た症例を経験したので報告する。

【症例】症例は、70歳代、男性で、胸痛、背部痛を主訴に近医を受診された。右胸水を指摘され、当院呼吸器内科紹介となり、胸水穿刺細胞診が行われた。

【細胞所見】炎症性背景に、N/C比大、クロマチン細顆粒状の高度増量、核縁不整、核偏在性を示し、明瞭な核小体を有する異型細胞が、孤立散在性、あるいは不規則重積性集塊を形成して出現していた。異型細胞の集塊には乳頭状構造、篩状構造を観察した。豊富な胞体を有する異型細胞も認められた。腺癌と診断した。

【セルブロック法による免疫組織化学染色】異型細胞は、calretinin, CK7, CK20, TTF1, p40 陰性で、AR 陽性、PSA 弱陽性を示した。以上から、前立腺癌を疑った。その結果を受け、血清 PSA 値が測定され、862.2ng/ml と高値を示し、胸腹部造影 CT や、MRI により、前立腺癌の多発転移が疑わ

れた。前立腺針生検が行われ、前立腺癌と確定診断された。

【考察】今回の症例では、胸水穿刺細胞診の細胞像から前立腺癌を推定することは困難であった。セルブロック法による免疫組織化学染色を行うことにより、前立腺癌を推定することが出来た。臨床は、肺癌を強く疑っていたため、胸水検体にて、前立腺癌を推定し得たことは、確定診断において極めて有用であったと考える。

【結語】前立腺癌の胸膜播種例は稀であり、診療早期に胸水検体にて推定し得たことは診断的価値が極めて高い。また、肺癌が疑われた場合、セルブロック法による病理組織診断、免疫組織化学染色には診療報酬算定が認められおり、診断的価値に見合った診療報酬が得られた症例でもあった。

連絡先：0742-24-1251（内線 5822）